

収穫多かった扇山採集会

(昭和54年度兵庫県生物学会採集会)

橋 本 光 政

昭和54年度生物学会総会第2日目(5月26日)恒例通り野外研修会が計画された。参加者も多く、採集植物も貴重な植物が得られるなど大きな成果をあげることができた。そのあらましを報告させていただく。

当日の登山には但馬の先生方のお世話でマイクロバスや乗用車が準備され効率のよい採集会であった。朝、会館前に集合し、それぞれ必需品だけをリュックにつめた軽装備で車に乗りこんだ。

湯村より国道9号線を走り千谷で左へ曲って、岸田川沿いに扇山へと向かった。霧ヶ滝の標識が見えて、しばらくして、車を止めた。ピンクの花が枝にびっしりと咲き人の目を奪わずにはおかないタニウツギや、装飾花の白いヤブデマリ、また、深山の道端に必ず出てくるコシヤクなどを採集する。更に、岩壁には但馬でしかお目にかかれないタジマタムラソウが葉を押しつけられたように着いている。

やがて、10年前但馬の夏季研修会で最初にお世話になった菅原の民家が見えてきた。以前とちがいがあまり人の住んでいる気配はしない。もちろん、建物もごくわずかである。廃村になってしまったのだろうか。道路はこの村まで補装はされているが、なんとなく寂しく時代の移り変りの激しさを改めて感じる。前回は初日にこの村より霧ヶ滝へ登り、オオシラヒゲソウやナンゴククガイソウを採集したことを思い出した。県下では貴重な採集地である。

菅原より林道に変わり、道幅もだんだんと狭くなり凹凸も多くなってきた。カーブは鋭角に、傾斜も強く車もなかなか登りにくそうである。前回は林道を設けて間もなくで、その無暴な工事法に怒りを覚えたものである。今はヤマハンノキやダイセンヤナギなどの第一侵入者が入り緑に包みこまれてしまったようだ。いや、そうではない、やはり所々大きく崩壊して、痛々しく生傷を露出しているところもある。たとえ、緑に包みこまれていても前記の植物の生えているような急斜面は豪雨時のことを思うと背筋に冷たいものが走る。

急な曲りがほぼなくなった頃小さな滝が左手に見えてきた。左側にはトチノキの大木が茂り、林床にはサンカヨウ、エンレイソウなどが見える。ほぼ冷温帯域に登ってきているようだ。

ブナの伐採跡を通り抜けると高原野菜でも作っているのであろうか、広い畑地が開けてきた。前回登ったとき

はブナの切株も新らしく周囲がまだブナ林に囲まれて焼畑式にソバが栽培されていたところがあったが、その場所のようにも思える。そうだ、畑が平高原だ。

車をほぼ県境付近に置き、いよいよ徒歩で登ることになった。見上げると、山頂部山塊をブナ林に包まれた扇山が遠望できる。歩くとき相当時間もかかりそうに思われる。まず、鳥取県若桜に通ずる林道から分枝して、しばらく林道らしき道を登った。コミネカエデ・ダイセンヤナギ・リュウブ・クロモジ・タラノキなどが伐採跡に二次的に2~3mの高さで続いていた。日当りのよい道端にはイワニガナがその真黄色の花を細い花梗をせいいっぱい伸ばして太陽に向けていた。その愛らしい姿に思わずかみこんでカメラを向けた。林道の終点からはチシマザサの間を縫って細い道が設けられていた。いよいよ扇山本来の植相が見られるのである。

昨夜のスライド上映会で本日採集の目標として捜してほしいと訴えた3種、ヒョウノセンカタバミ・ウスバサイシン・タケシマランがあるとすればこれからの林床や林縁である。更に、前回の採集会で確認したミヤマシシガシラも再度見たい。福崎の三木先生から頼まれているクモノスミレも採集したい。気持の高ぶるのを抑えつつ林内へと進んでいった。見事なブナ林が続く、オオカメノキ・ハウチワカエデはそれぞれ大きな白い装飾花を上向きに開き、また、深紅の小花を下垂させている。花はずでにないが小さな実果をつけたマルバマンサクも林床に3~5mの高さで点在している。日本海要素の重要なメンバーである。更にその下の林床にはツルシキミ・ツクバネソウ・ホソバトウゲシバなどが特徴づけている。

登山道のそばに少し湿った凹地があった。その壁をよくみるとミヤマシシガシラが数株その裸葉を広げている。昨年度の実葉しかないが明らかに元気な姿で再登場してくれた。林内は空が曇っているせいもあり写真を撮るには非常に暗い。ASA 400のフィルムで何とかシャッターを押した。

ユキザサが白い花をつけて点々と見つかる。チゴユリは多いがタケシマランではない。チシマザサの奇形がみんなの目を引いた。室井先生の説明を受ける。ササウオといってササウオタマバエの産卵のため組織が異常発育をして、魚の形そっくりの奇形ができるのだそうだ。次々とカメラを持っている人の被写体となった。

「このカタバミは例のカタバミですか」と足元のひ弱

そんなタバミを指された方がいる。一転してそちらを注視する。「そうです。そうです。これです。ヒョウノセンカタバミそのものです。やはりありましたね。今日の大きな収穫ですよ。」「よく見て下さい。葉の先がミヤマカタバミのようにとがらず円いんですね。牧野富太郎博士が氷の山に来られたとき、その葉形の違いに気付かれ即座に『ヒョウノセンカタバミとしよう。』といわれたそうです。」と説明する。小さな果実を着けている。コミヤマカタバミは円いが、これはミヤマカタバミに似て先がとがっている。また、本州の日本海側のブナ林域に分布し、染色体数は $2n=44$ 本で、4倍体である。まず、貴重な1種の発見となった。学名は京都大学理学部の寺尾さんによりつい先月の分類地理学会報に発表されたばかりである。

続いてしばらく登るとウスバサイシンを細見・安木の両先生が見つけられた。私は登りには捜したが見つからず昼食時に見せていただいた。よく開いた花もつけ見事な標本である。これも県下では氷の山に次いで第2の産地となる。

空はいっそう暗くなり、今にも雨が落ちてきそうな気配である。タケシマランはないかとゆっくり捜しながら登っていると最後尾となっていた。チゴユリはずっと続いている。よく注意してないと見つかりそうにない。遅れを取りもどさんと急坂を駆けあがり喘ぎつつ登っていると、あった！あった！チゴユリに混ってタケシマランが群をなして生えている。15~20cmの高さで2又に分枝したものもある。それも、花をつけて最盛期である。また、また、暗い中を無理かと思いつつ接写する。各節から1個ずつの花が下垂しているが、下部ではすでに終り上部ではまだ小さな蕾である。淡赤褐色に開いた花に焦点を合わせるが、4mmぐらいの小さな花ゆえ角度をうまくとらないと葉や茎がぼやけてしまう。カメラを変え、レンズを変えてカラースライドと白黒と2枚ずつ撮った。氷の山で中西先生の植生調査に挙っているのを疑ったことがあるが早計であった。さすが中西先生の目は確かである。今まで知られていたのは中部地方以北の針葉樹林帯で白山山系が西南限であったのだ。これまた大きな収穫を得たと報告できる。一行に追いつかんと歩を速める。時々雷音が響きわたる。これは危なくなってきた。頂上まで行けるが心配しつつ登っていくと、林床に腰を下ろして、めいめい弁当を開き食事中であった。時刻は少し早い雨が落ちてこぬうちに食事しているとのことである。同調して宿でもらった弁当を開く。採集物の話を交歓しつつ。

ほぼ食べ終る頃、心配していた雨が落ちてきた。同じ頃、先導して頂上まで登り下山してこられた方があり「頂上まで行ったが霧のため何も見えなかった。」とのこ

とである。雷音も激しく雨足も速くなった。全員急いで荷物をしまい込み、登山を中止して下山することになった。

下山途中雨は降っていたが、ウスバサイシンのあった場所を教えてもらいその周辺を捜してみた。ある、ある、葉も花も水滴に濡れ何株か見つかった。先程登った道端の林床である。全く気付かなかった。やはり多くの目で捜すと効率が良い。

車のところまで引き返す間、雷音は高く鳴り響き、雨はいっそう激しさを増して降り続いていた。しかし、収穫の大きさがそれらを全て洗い流して、むしろ採集会の成功を称えてくれているようにさえ思えた。

最後に、今回の総会及び、この採集会において下見から車の配備まで、全てお世話いただいた但馬支部の先生方に厚く御礼申し上げます。

〔追記〕今回の採集会で得られた貴重な採集物とその学名を記すと次の通りである。尚、これらの標本はもとより、今回の採集標本は全て京都大学理学部の標本庫に収納していただき証拠標本として残したいと思えます。ミヤマシシガシラ *Struthiopteris castanea* (Makino)

Nakai

タケシマラン *Streptopus streptopoides* (Ledeb.) Frye et Rigg var. *japonicus* (Maxim.) Fassett

ヒョウノセンカタバミ *Oxalis acetosella* L. subsp. *acetosella* var. *longicapsula* Terao

ウスバサイシン *Asarum Sieboldii* Miq.

クモノスミレ *Viola Faurieana* W. Beck. var. *rhizomata* Ohwi

支 部 報 告

西 播 支 部

支 部 総 会

日 時 昭54・10・27 (土) 14:00~17:00

場 所 県立姫路東高等学校視聴覚教室

内 容 総合行事と講演

(1) 県下のオオサンショウウオの生態について

講師 姫路市立水族館 柄本武良先生

(2) 第2次インドネシア、マレーシアのウミガメ調査の旅から

講師 姫路市立水族館長 内田 至先生